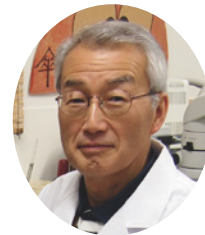


木材利用の試験研究機関に勤務して⑬

～普及課で世間の広さを学ぶ・下編～

旭川工業高等専門学校 名誉教授 富樫 巖



■はじめに

世間の広さ、加えて木材利用分野の広さも学んだ6年間の普及課勤務でした。本稿では、その間に小生が技術者個人として修得したと考えている知識やノウハウなどを振り返ってみます。キーワードは、「マーケティング」、「林産教育」、「技術士」です。

■マーケティングの基礎を紹介する

(一社)北海道林産技術普及協会(以下、普及協会)の業務を後方支援する活動には種々ありますが、普及協会が会員向けに毎月発行する会誌「ウッディエイジ(木材の研究と普及)」の巻頭記事原稿の提供もその一つでした。当時の林産試験場には研究職員が約90名いました。普及協会の「林産工業技術に関する試験研究成果の普及宣伝」の趣旨を盾に、それぞれの研究職員に持ちネタ紹介の執筆依頼ができれば十分すぎるほどの原稿確保が可能です。しかし林産試験場にも広報誌が存在しており、そう簡単にことが運びません。

普及課勤務3年目(2000年度)となって門前の小僧レベル程度に達した小生は、普及協会が原稿不足となった際の対応にマーケティングの基礎を紹介するシリーズ原稿の執筆を思いつきました。木材利用の試験研究成果を企業などにお伝えし、利活用を促す普及業務でもマーケティングの考え方が使えるとの閃きもありました(イラスト1)。事務分掌的には企画指導部・経営科の守備範囲に該当する可能性もありました。当時の経営科は製材工場における製造ラインの生産管理(労働生産性向上に向けた無駄時間の把握・排除)に力を集中していたこと、および普及課長によるマーケティング記事であれば互いの立場を理解し合えると目論見ました。

ウッディエイジ2001年9月号に木材産業のためのマーケティング講座「その1:消費者の利益を提案する」が掲載されました。2002年には1月号, 8月号, 12月号にそれぞれ、「その2:ブランドを確立する」、「その3:市場セグメンテーション&製品ポジショニング」、「その4:企業づくりの基本戦略」を

載せて頂き、2003年3月号の「その5:消費者とコミュニケーションを考える」で一段落としました。

5回シリーズですが、ウッディエイジとしても初めての2回を超える連載記事でした。嬉しいことに、連載終了後に本州在住の普及協会会員から1枚のハガキ(お褒めの言葉あり)が小生の元に届きました。



イラスト1. 売れる仕組みづくり・マーケティングの4P

注: 経済産業省中小企業庁 ミラサポplus <https://mirasapo-plus.go.jp/hint/19379/>を引用, 一部抜粋

■続マーケティングシリーズ執筆, そして…

ウッディエイジ2004年2月号から、木材産業のためのマーケティング講座の続編を「第2ステージ」として再開しました。『能ある鷹は爪を隠す』といわれますので、マーケティングを2~3年をかけて学び直した後に再執筆しようと小生は考えていました。

ウッディエイジの巻頭記事は歴代の専務理事が企画・編集を担当しています。2003年秋、当時の専務理事のIさんから、2003年12月号~翌年3月号の記事対応を急ぎよ依頼されました。『自分でやる方が早い病』の小生は第三者に執筆をお願いすることなく、すでに書き始めていた「気軽に読める森林バイオマス利用講座」と抱き合わせでマーケティング講座の再開を決め、4号連続の巻頭記事を仕上げました。急場はしのぎましたが、多彩な著者の登場と多彩な内容の原稿掲載の可能性を奪ったことにもなり、ウッディエイジ

の読者の方々には不足の残る対応だったかも知れません。

想定外なことも起こりました。北海道東海大学・芸術工学部がある旭川キャンパスからマーケティング論（2003年10月からの一般教養選択科目）の非常勤講師依頼があったのです。半期15回の講義を1人で対応する力量とネタ不足から、最終的には経営科長のIさんとの共同開講に至りました。

■日本木材学会・林産教育研究会

1986年4月に林産試験場に採用され、翌月に日本木材学会の会員となりました。年次大会での研究発表デビューは1990年4月（つくば市）と記憶しています。そして、1992年4月（名古屋市）から1998年4月（静岡市）までは「きのこ部門」で研究発表をすることが多く、各地の同分野の研究者に知り合いができました。

1998年度から普及課長となり、実験現場を持たない小生は発表ネタがありません。それでも年次大会に参加しようと思い、「林産教育部門」での事例発表を試みました。ネタは、2001年4月（東京）で木のグランドフェア（本シリーズ⑩参照）に対する考察、および2002年4月（岐阜市）でアート彫刻版（Colored Glue Plywood：C.G.P.）とその利用の取り組みの紹介です。発表会場でアート彫刻版のサンプル配布も功を奏し、木材利用文化の普及啓発用の教材・プログラム開発に励む教育分野の研究者（主に教育大学や大学の教育学部教員）との付き合いへと発展しました。

アート彫刻版は竹内木材工業合資会社と林産試験場が共同開発し、製品化された彫刻用教材です。木のグランドフェアでコンクール開催を実施するなど（写真1）、普及協会と林産試験場が共同で普及推進に励みました。詳細については普及協会50周年記念誌（ア



写真1. アート彫刻版コンクールの作品例

注：林産試験場林産試だより2006年9月号 <https://www.hro.or.jp/upload/50160/1060902.pdf> を引用、一部抜粋

ト彫刻板と北海道林産技術普及協会：https://rinsan-fukyu.jp/rinsan50/50_hurikaeru/minemura_moto_riyoubutyou.shtm）を参照ください。

2002年度には日本木材学会に林産教育研究会が新設されました。そして2023～2024年度の代表幹事を林産試験場のOさんが務めました。同研究会で初代幹事の1人でもあった小生としては、20余年前に普及課で共に汗を流した同氏の活躍を嬉しく思います。

■技術士（森林部門・林産）資格を目指す

専門分野に限らず、技術者として気になる資格の一つに「技術士」があります。普及課勤務2年目、元上司のMさん（当時、林産試験場・特別研究員）から試験場勤務十数年間の技術実績をまとめる意味で受験を勧められ、難関と評される資格試験に挑戦しました。キノコ栽培技術を中心とした林産分野全体の知識と苦手な林業分野の知識を頭の中に叩き込む必要があり、勤務後の受験勉強は砂を咬むような思いでした。

ほぼ社会人が受験生ですので受験申請をしたもののように勉強が進まず、受験を見送る割合も低くはありません。小生も同様でしたが、ダメもとで札幌市での筆記試験に臨みました。予想もしなかった合格通知が届き、次は東京での面接試験です。筆記試験後の勉強不足ながら合格煩惱が急激に湧き上がり、更なる窮地へと自分を精神的に追い込んでいました。この挑戦についてはウッドイエイジ2000年12月号に「技術士（林業部門）受験体験記」（<https://rinsan-fukyu.jp/wp-content/uploads/woodyage/2000/200012A.pdf>）として掲載されました。それから22年後の林産試だより2022年12月号には研究職員のAさんが「技術士という資格を知っていますか」（<https://www.hro.or.jp/upload/8966/2212-4.pdf>）を執筆しており、受験制度や受験内容が時代の流れに沿って変化していることが分かります。

技術士を取得して給料が上がるケースは多くないと察します。しかし、資格はかさ張るとか邪魔になるものではありません。自己満足含む技術者としてのステータスの確立、一仕事を成し遂げたキャリアの区切りとしてもチャレンジして欲しい試験です（正確には、技術士二次試験）。小生にとっては技術士資格を得ていたことが、後の旭川高専・教員採用試験の応募時に強力なアピールポイントになりました。

（つづく）